

日本人墓地慰霊団に参加  
(ハバロフスク・パルチザンスク・ウラジワスト  
ツク・ナホトカ展墓)

(三重県 林 英夫)

## 第二次世界大戦回顧

滋賀県 吉田 貞次

昭和十二(一九三七)年七月七日、北支の一端  
盧溝橋で勃発した事件で支那事変となり、大東亜  
戦争、第二次世界大戦ともなりました。支那事変  
当時は野洲尋常高等小学校高等科二年生でした。  
八月上旬、野洲町で在郷軍人中五人に召集令状が  
届きました。

支那事変も刻々と激戦となり、八月末には野洲  
町で五十人程度が召集令状で出征をされました。  
続いて九月、十月と召集令状により出征をされま  
した。十二月十三日、当時支那の首都南京陥落。  
日本では昼は旗行列、夜は提灯行列、仮装行列と、  
陥落祝賀行事が全国各地で催されました。

翌年五月十九日には徐州陥落と、当時五カ月六  
日、祝したものでした。九月には大別山が陥落し  
ましたが、京都部隊の第十六師団従軍で、野洲町

で五人が名誉の戦死を遂げられました。

野洲町では過去三人の戦死者がありまして、町葬で一人ずつの葬式でしたが、今回は五人の合同葬が執り行われました。

御国のためとは申しますが、本当に国の犠牲者でした。私たちの集落では、母親一人息子様一人で、昭和十年十二月一日現役兵として入隊され、真面目に勤務をされ中隊一番とも聞いておりました。当時、下士官勤務上等兵で、昭和十二年六月三十日、現役兵を満期除隊をされましたが、昭和十二年八月三十日、召集令状を受け入隊されました。その時の母親の気持ち、勿論本人はどんな気持ちであったでしょう。昭和十三年九月十一日、片桐部隊の大別山攻撃で大勢の戦死者が出ました内の一人でした。一人息子が戦死をされたので親戚より養子を貰い、相続人として町葬を行われました。

戦局も深まりましたが、中国はなかなか広い国のため日本軍も勝利は見えず、長期戦となりまし

た。

昭和十六年八月九日、私にも産業戦士として出頭令状が来ました。来る八月十二日午前九時、大津市公会堂に出頭せよとのことでした。私は予期もしない出頭書に驚きました。野洲町には五人の出頭令状が来ました。

八月十二日、野洲町より五人の者は大津市公会堂へ行きました。検査官が説明をして身体検査を受けました。合格者には八月末日までには徴用令状が届きますからその準備をなさいと話されました。野洲町より五人が行きましたが、合格者は三人でした。

八月末日、徴用令状が届きました。来る九月十日、広島県呉海軍工廠に入廠すること、但し九月九日午後三時、大津市立中央小学校に集合。衣服寝具は一週間前、指定の所へ送ること等、詳細に書いてありました。

九月九日午前十時頃より親戚一同、隣組の方々が出発に際しお祝いの挨拶に来て下さって、皆さ

んに出発の挨拶とお願いをする。

「日支事変も深刻となり長期戦となりました。私も産業戦士として呉海軍工廠へ徴用されました。この戦争に勝つまでは国のため、国民のために一生懸命頑張ります。なお、留守中は家族の者がお世話になることと思いますが何卒よろしくお願います」と挨拶を致し、我が家を後にして出発する野洲小学校へと向かう。午後一時頃より野洲小学校校庭において、野洲町主催の壮行式が野洲町出身三人の者に挙行されました。

野洲町長野田市松殿より激励の挨拶を受ける。

「この度、野洲町より三人の方には、戦局も長期戦となりましたことに伴いまして呉海軍工廠へ徴用工員として出発されることになりました。戦争には第一線で活躍をしていただき、又、銃後の産業戦士として活躍されることとなりました。身体には充分留意され、お国のために頑張ってください」と激励の挨拶を賜りました。三人を先頭に、小学校の生徒、親戚の方、一般の皆さんに歓呼の声で

野洲駅まで送って頂きました。列車に乗る。万歳の声で、姿の見えなくなるまで手を振りました。

大津市立中央小学校では、滋賀県全員約百人数度でした。県主催で壮行式を挙行する。

滋賀県勢百人は夜行列車にて呉に向かう。九月十日、呉海軍工廠入廠式に参列す。終了後、呉港より鍋港まで船で輸送され鍋港に上陸す。警固屋十丁目、堤寄宿舍に入舎す。

堤寄宿舍には約五千人余りの寮生でした。私は生まれて初めて寄宿舍生活をしました。

満十七歳で家族と別れて呉海軍工廠へ徴用工員として勤務をすることになりました。所属は製鋼部検査係分析工員でした。分析工は鋼の分析で、鋼の成分を調査するのが仕事でした。仕事は軽労働でしたが、化学薬品を利用するので身体が大変でした。

呉海軍工廠は東洋一の造船所で、面積の広いのに驚きました。工廠内には鉄道施設、バス運行、毎日の通勤も高等官はバス、判任官は鉄道で通勤

でした。延長は十キロメートル、幅四キロメートル位がありました。

戦艦「陸奥」「長門」と言えば我が国最大の戦艦でしたが「大和」「武蔵」に比べると、「大和」「武蔵」は大人で「陸奥」「長門」は子供位に見えました。我が国の戦艦は呉海軍工廠で造船をされました。あの「大和」「武蔵」の戦果を期待しておりましたが残念でした。我が国の国防費が「大和」「武蔵」に何パーセントか解りませんが、巨額が太平洋戦争で沈んだ訳です。

昭和十六年十二月八日、真珠湾攻撃より日米戦争は開始しました。当時呉の街は、灯火管制により真っ暗闇となりました。昭和十七年二月には「シンガポール陥落」と喜んでおりました。「マレーシア」「タイ」「ビルマ」と攻撃を続けましたが戦果は見られず、戦局も激戦となりました。

呉海軍工廠の徴用工員は、昭和十七年度は本籍地で徴兵検査を受けましたが、昭和十八年度は徴兵検査の受検者も多く、本籍地を呉市に寄留して

受検となりました。昭和十八年五月二十三日午前八時より、呉市立第一小学校で徴兵検査を受けました。広島連隊区より検査官は来られました。確かに軍隊は厳しく、早朝より一日中軍隊生活としたい検査を受けました。検査も終わり、最後に検査官の前で「甲種合格」と背中を叩かれ、復唱「甲種合格」「よし」と申され、やれやれ徴兵検査も終わりました。私も軍隊へ行けば呉海軍工廠の徴用工員とお別れができると思いい心から嬉しかった。翌日からは軍人勅諭、先陣訓や典範令の勉強をしました。入隊までに軍人勅諭と戦陣訓や典範令の勉強をしました。そして軍人勅諭と戦陣訓は覚えることができました。

昭和十九年一月三十一日、呉海軍工廠とお別れの日が来ました。約二年六カ月、徴用工員として無事に勤めることができました。職場の皆さんからは餞別を頂き、永らくお世話になりましたとお礼を申して呉の街を後にして入隊準備に帰郷しま

した。

入隊は満州国黒河省瓊瑋満州第六一二部隊・野砲兵第四中隊佐藤隊に決まる。

昭和十九年二月九日、朝から氏神様に武運長久祈願に参る。親戚の方は朝からお祝いに来て下さった。午前十時頃より親戚、隣組、友人から祝つて頂く。出発前に皆さんに挨拶をする。

「本日は私のために早朝よりお祝いに来て頂きまして本当に有難うございました。昭和十六年に徴用工員として呉海軍工廠へ入隊しました時このように祝つて頂きました。この度は軍人として遙か満州へ入隊することになりました。戦局は激しくなり、日本の国も大変でございます。私も一生懸命軍務に励み、日本が勝つまで頑張ります。留守中は家族がお世話になります。がよろしくお願ひ申します」と挨拶する。

親戚の伯父が「吉田貞次君萬歳」と元氣よく発声をされ、全員で元氣よく萬歳をして我が家を後に、自治会の忠魂碑前で「市三宅区の告別式」を挙行

されました。終了後、野洲町立小学校校庭で野洲町主催の壮行式を挙行され、野洲町長野田市松殿より激励の挨拶を受け、野洲駅まで野洲町幹部の方々、各種団体の長、親戚、小学校の生徒等々の歓呼の声に送られて行く。列車の窓より手を振り萬歳で別れる。京都駅で滋賀県出身者は集合。夜行列車で広島に向かう。

翌日、広島西練兵場で入隊式後、身体検査を受ける。徴兵検査から約八カ月経過し、身体の悪い者で即日帰郷者もいました。

二月十三日午後十一時頃、広島師団東練兵場より軍用列車に乗車する。列車は九州博多に向かう。午前五時頃、昨年開通の関門トンネルを通過する。午前九時頃、博多港を出港。途中、玄界灘では波が荒く全員船酔いをする。約八時間で釜山港に着。冬の寒い釜山港で夕食を食べる。午後九時頃、朝鮮鉄道釜山駅を出発。朝鮮半島を二昼夜で通過す。第一夜は車中で演芸会を開催す。軍歌、流行歌、歌謡曲等色々と楽しかったが、二夜三夜とな

ると退屈でした。網柵や通路に寝る場所を取るのに競争でした。通路に寝ると、便所に行く者に何回となく顔や頭を蹴られました。

朝鮮半島通行の二日間は食事給与も折弁当でございまして、満州へ入つてからは飯盒で受領し、飯盒の盛り分けて粗食でした。

客車輸送も六日間乗るとまた退屈で、お互いに早く降りて長く伸びて寝たいなと口癖のように話しました。列車は北黒線に入りました。満州は実に広い国だと実感をしました。

二月十九日午前九時頃、朝水駅に到着。朝水部隊三個中隊は下車する。部隊の兵舎まで約三十分、徒步行進をする。中隊に到着する。装具は中央廊下右の初年兵班に置いて営庭に集合、初年兵約八十人は営庭に整列をする。満州第六一二部隊野砲兵第四中隊長陸軍大尉佐藤勝殿より初年兵に歓迎の詞を述べられますと、上官より命令がある。中隊長より歓迎の詞「君らは遠い内地より遙々と北満の地まで、また極寒の地へ御苦労です。この朝

水地は君らの墓場である。ソ連軍が攻撃しても死守するのだ」と強調された。中隊長は、関西人間は大嫌いだ、口は上手だが実行ができない。昔、第四師団の歩兵八連隊は戦争で斥候に出た者が、敵情捜索もせず適当な報告をしたので敵に包囲をされ負けた例があるので、と中隊長は初年兵に強調されました。昼食は御祝いの「赤飯」を頂きました。また夕食も赤飯だと思つたら高粱飯でした。高粱は麦より味が悪いです。

野砲兵には分業があります。「観測」「通信」「砲手」「御者」がありました。「観測は敵情捜索」「敵地から砲列までの距離」「方向」「高低」を測量する。通信は「観測のデーターを砲列（砲手）に連絡をする。砲手は眼鏡で「距離」「方向」「高低」を合わす。分隊長命令で発射をする。御者は火砲を砲列地まで輸送する、馬六頭で引き移動をする。初年兵は分業により訓練を受けて、三カ月で一期の検閲を受けました。私は観測の重測遠機が担当でした。重測遠機は、敵地までの距離を観測するの

が任務でした。野砲兵は、友軍歩兵の援護射撃が目的です。重測遠機が距離を間違えば歩兵部隊を射撃することになります、慎重に測量をすることが基礎でした。

入隊前より、一期検閲は初年兵の軍事訓練の基礎となるように聞いておりました。一期の検閲は満州第六一二部隊長陸軍少将小林隆閣下、野砲兵連隊長陸軍少佐長島巖殿、大隊長陸軍大尉安心院殿他大勢の直轄上官ばかりが欠点を見ますので、平素はできても初年兵は「おめて」しまい、上がつてしまう状態でした。中隊長、小隊長、助教授、助教、助手は一生懸命でした。検閲官は講評で「やや良好と認める」と申され、中隊長以下初年兵に至るまで「ほっと一息」という様子でした。二期の検閲は楽に終わりました。

八月十日付で「上等兵候補を命ず」が約一〇％で、残りは「一等兵を命ず」の命令でした。上等兵候補は精勤章、赤で山型一本授与され、右腕に着けました。軍隊生活は毎日厳しい訓練を受けま

したが、また楽しい演芸会もありました。中隊全員一個班に集合をする。まず初年兵から軍歌、流唱歌、浪曲等を順番に出演した。三重県出身の浜口佐治雄君、浪曲が上手でした。「芸は身を助ける」と申しますが中隊での人気者となり、古年兵から評判でした。また内地の部隊では「軍旗祭」が催されましたが、満州部隊では部隊の創立記念日には軍旗祭同様の催しがありました。各中隊別で各種の競技、また演劇もあり、平素は全然知らずにおりましたが、あの戦友が、古年兵があのような特技や芸を持つておられる等、立派な場面を發表されました。軍隊でもこんな楽しい一日が過ぎられました。

佐藤中隊長は一兵卒から下士官候補に合格、准尉で少尉候補生に合格され、現在陸軍大尉で、陸軍野砲連隊第四中隊長ですが、日支事変には現中国の地で活躍をされました。大分出身で、さすが九州男児とも言うべき男の中の男であるという。性格は中隊長では厳しい方でした。常に中隊長は

厳格で、何事もやるべき時にはやるのだ、また創立記念日には大いに楽しく遊ぶのだと話されました。

創立記念日応援歌「朝水神社の神主が、おみくじ引いて申すには、今度も佐藤隊が勝つ勝つ勝つ勝つ」。中隊別競技は、応援団の応援が大変面白かった思い出があります。

上等兵候補は一般兵より厳しい特別教育を受ける。例えば指揮者になって号令を掛ける練習等、中隊幹部になる教育、号令調整では声が嘎れて咽が痛く困りました。ようやく特別教育も終わって、一選抜上等兵の命令が出る。昭和二十年二月十日付で「吉田貞次、右の者は陸軍上等兵を命ず」。早速、中隊長中隊幹部、内務班長、内務班専任兵長、内務班全員に申告、報告をする。階級章の着替え。明日は紀元節の祭日で休日ですが、部隊の衛兵所勤務の命令、同年兵の一等兵の者は、上等兵になったらその位は当たり前だと「いやみ」を申す。

上等兵になると勤務が多く「舎内週番上等兵」「既週番上等兵」等、一週間勤務をする。舎内週番、既週番勤務を連続でする。

昭和二十年六月のこと、既週番上等兵勤務中の事件。当時、中隊長陸軍中尉北条專精殿の乗馬「村照号死亡の件」。早朝より陣地放牧場で中隊馬を放牧中、監視兵二人が勤務をする。夕方午後五時頃、放牧場より厩へ馬を全部入れる。一頭不足と厩当番より報告を受ける。不明馬が中隊長の乗馬「村照号」と判明。当番二人と週番上等兵の三人で陣地放牧場を大探しする。夕日が落ちかかっている時凹地で中隊長乗馬を発見する。既に死亡す。馬は、陣地内電線がたれ下がり、その電線で感電死をしており、早速堀口至彦週番下士官に報告する。週番下士官より、二站陣地構築のため出張の中隊長に報告。素早く中隊長に連絡ができました。中隊長は即帰るとのことですが、罪が心配でした。週番下士官は禁固、週番上等兵は営倉に入られるという「デマ」が飛ぶ。吉田は営倉を覚悟

する。中隊長は報告後三時間後に中隊へ帰られ、週番下士官、週番上等兵は「村照号」中隊長乗馬死亡事故について経過報告をする。

中隊長は「中隊長乗馬村照号」の事故死の経過調書をとり、「週番下士官、週番上等兵の過失に対しては「中隊長が責任をとる」と申され、二人の刑罰は中隊長の一言で「中隊長乗馬村照号死亡事故」の件は無罪で終わりました。中隊の幹部はじめ、隊員二人の無罪にはあきれていました。同年兵も、吉田の営倉は気の毒と思った者、また反面、上等兵になったから勤務事故になった、一等兵であれば平凡だったのにと、様々な批評だったと聞きました。

昭和二十年八月九日午後八時頃、日夕点呼にっせき、同時に「ソ連軍が我が陣地を戦車隊で包囲をする、我が中隊は陣地内兵舎へ移動すべし」の命令が下った。国境守備隊の本領だが、初年兵教育で訓練を受けた「観測の重測遠機」はなく、「十センチ榴弾砲は南方戦線のために出され、陣地内では迫撃

砲だけ。関東軍の弱点を確かめてソ連軍は攻撃をしました。

北條部隊長は「陣地は戦車に包囲され、黒龍江より艦砲射撃、空から空軍の機銃掃射で防御戦ばかり、袋のねずみ状態だ、朝水陣地を死守せよ」の命令を下す。同じ玉砕なら肉弾戦と決め、急造爆雷を抱え敵の戦車に肉薄攻撃をする。渡壁少尉以下十五人は第一編成で挺身され、全員戦死でした。渡壁少尉は胴と足が切断され、五メートル程も飛び上がりました。爆弾も上手に爆発すれば戦車は全滅ですが、一部爆発程度で、三十センチ程地上より上がり行進しましたが、兵は戦死しました。第二編成に私は編成され、命令を待つておりました。そのうち命令が来ると死は覚悟しておりましたが、命令違いでした。

八月十五日以降は敵機が少ないとは感じていましたが不思議でした。八月二十日夕刻に報道があり、終戦らしい、日本は負けたと言いました、しばらくすると部隊長より命令がありました。

「日本は無条件降伏をしました」と伝えられ、残念で、その命令が信用できませんでした。部隊長も「残念で残念でたまりません」と涙を流して全員に命令を達しました。

「明日八月二十一日午前八時現地に集合、兵器、小銃、帯剣を付けて徒構図に向かう。徒構図においてロシア軍の命令で武装解除を受ける予定です。命令は終わる。詳しいことは明日に命令する」。

二十一日午前八時頃、部隊長以下全員は武装して集合する。出発時に携帯口糧一食分を支給される。後の食糧はその都度渡すからと言われ、取り敢えず一食分を貰って、中隊長の命令で懐かしい朝水陣地を後にして出発をする。朝水部隊の衛兵所表門付近にロシア人の死体が五体程あり、また百メートル歩くとロシア人の死体が五、六体ありました。戦死してから日数が過ぎ、うじ虫が体中についており、避けて通りました。体が腐って臭かった。夏でもあり、早く腐ります。悲惨な戦場跡地を行軍する。昼前に徒構図へ到着をする。

ロシア軍の兵士が解らぬ言葉で話していました。しばらくするとロシア軍の命令で、兵器を山積みにして捨てました。約一年半、朝夕に手入れをした「銃と剣」、自分の命と同様の魂とも言うべき兵器。手入れが悪いと兵器に謝る教育を受けた兵器に涙を流して感謝をしながら命令通りに捨てました。戦争に負けた哀れさが身にしみました。

昨年二月九日、「勝つて来るぞと勇ましく」誓って我が家を出て来ました。銃後の皆様に歓呼の声で送って頂きました。また私は、天皇陛下のため、国民のために命を捨てる覚悟で出て来ましたのに、戦争に負けたとは残念でした。また私は、日清、日露の戦役以降今日までの戦争で何百万人の戦死者、靖国神社の神と祭られし英霊に対し何とお詫びをする等、今は亡き英霊は日本が「無条件降伏」とは思ってはおられない。日本が勝つために命を捧げて国のために尽くして下さったのです。「靖国神社の英霊には感謝の誠を捧げましょう」。

武装解除より赤軍の指揮により行動をする。満

州鉄道は南方二四〇キロメートル孫呉で破壊され、満鉄は不通のため孫呉まで行軍をする。孫呉で満鉄に乗り朝鮮經由、釜山港より内地へ帰るといふデマが飛びました。

日本軍は赤軍の命令で行動をする。四列縦隊に整列をする。前・中・後を赤軍が自動短銃の実弾入りを持つて日本軍を監視しながら孫呉に向かつて行軍をする。昼夜の別なく、食糧は乾パン一袋だけ。途中で支給すると聞いたが支給なし。行軍中、川の水を飲む程度。途中水溜りの池があり、月の光で清水せみすいに見えたので皆で我れ先にと飲みましたが、夜明けに水溜りを見るとボウフラが一面でした。それを見て誰一人、水を飲む者がいませんでした。人間には水が必要です。

徒構図を出発してから三昼夜、不眠不休で孫呉に到着する。乾パン一袋（塩味ビスケット三十四個入り）で二四〇キロメートルの行軍三日間。体は疲れと睡眠不足でふらふら状態でたどり着いたのは、鉄条網を張った軍属官舎の宿舎でした。

日本軍は孫呉に着いたら満鉄の列車に乗りし、釜山經由で内地に帰るように思っておりましたが、鉄条網の軍属官舎に入り前途は不明、不安の一夜を過ごしました。

翌日より毎日、旧関東軍の貨物廠の糧秣（関東軍五十万将兵が十年間の糧秣を貯蔵何カ所）を貨車積み作業。朝から午前三時まで、九十キログラムの麻袋（米・麦・大豆・小豆・燕麦・高粱入り）の積み込み作業を毎日九月十四日まで。

九月十五日、作業大隊の編成。作業大隊十一大隊第二中隊第一小隊第一分隊に属す。作業大隊は孫呉を出発（デマは黒河に向かい黒龍江を南下、樺太經由で内地へ帰る）。事實は、孫呉を出発、黒河に向かつて行軍をする。携帯品三人に二枚の毛布が財産です。孫呉より黒河まで約三四〇キロメートルの距離を行軍する。途中に懐かしい朝水を通過す。関東軍として一年六カ月余り、天皇陛下に忠義を尽くし、また家門を傷つけないように軍務に勉強しました。ソ連軍の戦車隊の攻撃を受け、

十二日間の戦争をした朝水陣地を後に、名残惜しい朝水「さらば朝水よ、また来るまでは」。

朝水を後にして黒河へと進む途中、満人は日本兵に対し石を投げました。日本兵は満州人を奴隷のように扱ったと恨みを持っているのでしょうか。

九月二十日、黒河に到着。黒河の街も戦争で荒野が原、木造住宅は焼け鉄筋建築は骨組みだけ、実にみすばらしい風景でした。

黒河より貨物船に乗船す。「樺太方面」か「ソ連行か」運命の境道でしたが、船はソ連（ブラゴエシチェンスク）に上陸す。黒河とソ連領の川幅は約五百メートルでした。水の流れはかなり急流で、冬になると結氷するとは考えられませんでした。

上陸後、広場に毛布で幕舎を建て、毛布を敷いて寝ていましたが、雨が降り毛布は濡れて眠れず困りました。翌日、木の枝を折って下敷きに敷きました。翌日、木の枝を折って下敷きに敷きました。翌日、木の枝を折って下敷きに敷きました。

十日間露営生活、食事はスープ程度二食でした。ロシアは国策で「働かざる者は食うべからず」に

従いまして、毎日作業はしないから二食でも食べられたら上等でした。

十月一日、ブラゴエの街の中に空き家の荒れ家がありました。それが作業第十一大隊の捕虜収容所でした。窓の障子はなく、床もなく土間でした。

窓は煉瓦で塞ぎました。土間のままで三段装置の棚（バッテリー）式で、段の床は（ミザラ式）板の隙間をあげて板張り。三人で二枚の毛布で寝ました。交互に寝るので隣に寝る者の足が臭く、お互いに隣の足が臭いと言いながら寝ました。

電灯はなく、缶詰の空缶に工場の廃油を持ち帰り、それを入れて上から空缶を蓋にして、缶の真ん中にボロ布を芯に入れた「カンテラ」の灯で電灯の代用でした。

収容所は約百メートル四方の面積で、四方を鉄条網で三・五メートルの高さで張り、約一メートル離れて高さ一・五メートル位の三重の鉄条網を張り、四隅には三・五メートルの高さに望楼を設置し、自動連発銃に実弾を込めて監視をする。鉄

条網より三メートル以内に近寄れば射殺すると規約があります。

ある人は、下痢のため便所が遠いので鉄条網三メートル以内へ近寄り射殺されました。

十月二日よりブラゴエシチェンスク市内工場の雑役作業に出る。各工場の所要人員に応じて各班ごとに分かれて出発をする。各工場のロシア人は、毎日変わらずに同じ人が欲しいと話すので、当分は同じ者が同じ工場へ行く毎日。変わると毎日仕事を教えるのが面倒で作業の能率が悪いから同じ者を要望する。

九月末か十月に雪が降り、毎日零下五〇度の寒さで困りました。

シベリアの冬は初めての冬で、特に初年兵は困りました。自分等の大隊は千人で、十月から四月末日の間に約四割が死亡しました。病名は「栄養失調」「凍傷」「発疹チフス」等で亡くなりました。死体は禪一枚で、着ていた衣服は裸にして全部引き揚げてしまいました。

ある朝、自分の戦友で同年兵、福島県出身の金井要君の隣に寝ていました。「金井君、朝だ起きろよ」と呼びかけ、「朝食（スープ）を食べて、さあ出発だ、起きないと作業に間に合わない」と体を起そうとすると冷たく、体は堅くなっていました。

「班長殿、金井君は死にました」と報告する。「吉田は戦友だから今日は使役に出ろ」と申され、早速監視兵立会いで衣服を脱がし、死体をトラックに積む。体は堅くなり、戦友と二人で丸太を積みよるに「いちにいのさん」で調子を合わせて積みました。我が大隊で毎日二十五人か三十人の死者を出しました。トラックに乗って街外れまで行き、また丸太を下すように足と頭を持って「いちにいのさん」で三十人の死体を捨て、帰りました。毎日の死体で山積みになりました。今でも思い出しますが、あの死体はどうなっただろうと不思議に思います。毎日の死体で、自分も今日死ぬか明日死ぬかと覚悟はしておりました。初年兵の元気な高橋君に「吉田が死んだら頼むぞ」といつも話して

おりました。

「捕虜生活はこの世で最低生活」と口癖のように話していました。例えば、夕食を食べてから寝ますが、しばらくすると「カンテラの灯」で「シラミ」取りが始まります。首から体全体に「シラミ」が排出し、痒くて寝られず困りました。シャツ一面に「シラミ」がいっぱいついていきます。「シラミ」取りも気休めです。少し殺してまた寝ますと、今度は腹が減って寝られませんか。腹の皮が背中の骨に付くような感じでした。腹が減って寝られない経験をしました。日本に帰りたいと夢のように思っていました。当時は体重測定はありませんが、約四十キログラム余りだったと思います。捕虜生活はどうか生きるのに精いっぱいでした。

昭和二十一年五月、「日本人捕虜収容所管理局直轄農場」へ転属命令で移動しました。現収容所から北へ二〇〇キロメートルのところの農村地帯で、近所の集落はコルホーズ（集団農場）でした。また、ロシアではソフホーズと言う国营農場の集落

もあります。

ソ連国の政策は国营化（ソフホーズ）の計画を奨めていました。管理局農場には管理人が一人で、日本人抑留者を使って農場作業をしていました。

農場作業は馬鈴薯の種薯を植えるのが仕事でした。日本人は腹が減って困っておりませんので、植えた種薯を掘り起こして持ち帰り飯盒で炊いて食べていました。その時は解りませんが、しばらくすると芽が出て葉が出て葉が付きますが、日本人が掘り起こしたところは芽が出ませんので管理人は「ヤポンスキー、ヒーテリ（日本人はずるい）」と怒りました。日本人は「ヤポンスキー、ニズナイ（日本人は知らない）」と答えると、また管理人は「ヤポンスキー、ソウダーツ、ヨツポイマーチ（日本の兵隊は悪い）」と何度も怒りました。管理人は、種薯が収穫時には沢山獲れるのに今食べたら大きい損だと怒っている意味は解っていますが、今日本人は腹が減って困っているから食べたのです。日本人は食べられる物は何でも口に入れます。

た。胡瓜の葉でも口の中では困っても食べました。今考えるとおかしいようなことです。ロシアの日本人抑留者でも、場所によってはよい待遇の部隊もあつたそうです。全国強制抑留者協会で話を聞くと、私らは最低の低を歩んでいたと感じました。管理局農場の収穫も終わりました。

昭和二十一年十一月には、管理局農場より約三五〇キロメートルの「アレキサンドルファ」収容所へ移動しました。その収容所はソフホーズの農作業の手伝いで、各現場へ所要人員が分かれて作業に行きました。

メトフェ乳牛の牧場は乳牛を三百頭位飼っていました。国営ですから労働者のはのんびりしたものです。その作業は、乳牛の乾草飼料を馬二頭引きの馬車で五百キロを運搬するのです。零下五〇度のところで馬二頭を走らせ、約三〇キロメートルのところまで乾草を半トン積んで帰るのです。行きは空車です。乾草積み用のフォークは先が細く突かれたら痛いですが、二頭の馬の尻をフォーク

で突いて走らせるのです。馬は突かれて血が出ていましたが、三〇キロメートルを乾草半トン積んで帰るのには余程走らないと帰れませんでした。馬も可愛想ですが、日本人抑留者には災難です。

厩舎の手前まで帰ると馬の尻から血が流れており、乾草でこすって解らぬようにしますが、厩舎管理人から叱られました。収容所へ連絡がありました。

一日の作業を終え、夕食後収容所内の一カ所に集合し共産主義の思想教育を受ける。週三回か四回。指導者は青年行動隊約十人が通訳を通じてロシア人より指導を受け、その人が夜指導教育をする。その教育を受けないと反動分子としての取り扱いを受け、また特別教育を受けるようになります。

作業で小麦刈り作業に出た。麦刈りが遅れて雪が麦の上を覆い、雪と一緒に小麦刈りをしました。麦刈り作業も、例えば今日五アールの割り当てを一生懸命に刈り、昼過ぎに終わって帰ります。翌日は八アールに増えておりますが、日本人は正直

に刈ります。午後三時頃刈り終わり、帰ります。また翌日は十アール程度の割り当てをする。日本人はロシア人に、麦刈り面積が毎日増えるのが納得できぬと交渉する。ロシア人は「日本人は早く帰るから面積を毎日増やす。毎日ゆつくり一日かかって刈ればよいのに早く帰るから面積が増えます」と。翌日から「のんびり」夕方までかかり刈ることにしました。

ソフホーズ作業も種々様々な作業をしましたが、ちょうど一年、アレキサンドルフカにいました。

昭和二十二年十一月一日頃、「日本人は内地へ帰るため列車でナホトカへ行く」と命令がありました。列車は貨物列車で、床に下敷を敷いて寝ることができません。客車輸送より貨車輸送の方が楽でした。約十五日乗車しました。北のシベリアでは雪が少なく、南へ来るほど雪が深く、不思議でした。極寒地は雪は約二十センチ〜三十センチ位でした。ナホトカに到着。いよいよ日本に帰れると喜んでおりましたが、一度身体検査をするとの

命令で、実は「強兵」「弱兵」の検査でした。「強兵」と認められた者は日本に帰らずナホトカに作業隊として残りました。弱兵は病院船で日本に帰りました。

「強兵」「弱兵」の差があり、弱兵を見送り、別れを告げました。強兵は山の収容所へ行き、またロシアで作業することになりました。ナホトカより八キロメートルのところに収容所があり、毎日ナホトカまで歩いて作業に出ました。収容所は午前四時起床、同五時頃朝食、同五時三十分集合、同五時四十五分出発。約八キロメートルを歩く。ナホトカ港で作業をする。

作業は、岩を火薬で割る、その後日本人は大ハンマーで岩を砕き、その石を一輪車で運ぶ。一メートル立方で長く積む。一日の作業量は運んだ石で検査を受ける。一日量何立方メートルと測量をする。立方数により食糧の配給が違います。後日、その割り石をナホトカの海にあけるのです。一枚の足場板を一輪車で割り石を積んで海にあけます。

夜間作業もあります。夜間作業で一輪車に石を積んだまま海へ落ちました。約三メートル下に落ちて、助けてくれと叫んでおりますが誰も助ける者はおりません。落ちた人は犠牲者です。抑留生活はどこで死ぬか解りません。また、岩を割るため「ハツバ」をかける間は退避をしますが、退避解除後作業に行き、開いた岩が戻り、岩と岩に両足を挟まれ助けてくれと泣いているが仕方なく、助けることもできず気の毒だと思っただけ。おそらく両足切断と思います。全然知らぬ人でしたが気の毒な現場でした。ナホトカの作業も毎日一六キロメートルの道を歩いて作業に出ました。その間、引揚船が港に着くとロープを張り、無断で乗船できないように注意しています。

ヤレヤレ、ナホトカ港まで帰る予定で来たのに築港の準備作業ばかり、いつ日本に帰れるか不明の毎日でした。作業の往復は「赤旗の歌」「メーデーの歌」を歌いました。軍隊当時は「関東軍の歌」「砲兵の歌」「さらばラバウルよ」等の軍歌を歌い

ましたが、戦争に負けたら「赤旗の歌」とは情けないと思いつながら歌いました。

昭和二十三年五月五日、「本当に日本に帰れるらしい」と情報が入りました。五月七日、ナホトカ港に整列す。引揚船「信濃丸」で、一名ずつカタカナで名前を呼び、栈橋を渡り乗船をする。船員に聞く。「この船は本当に日本に行きますか」と尋ねると、船員は笑って「舞鶴へ着きます。私は奈良出身です」と答えてくれました。「私は滋賀県です。奈良県の隣です」と話す。三年間の抑留生活と別れを告げる。一日千秋の思いだった抑留生活の苦労を忘れる「信濃丸」は、舞鶴港へと急いで航海をする。ナホトカも見えなくなり、一日は海だけ。

五月九日午後四時頃、引揚船の乗員一人が「内地が見えたぞー」と叫ぶ。我れ先にと甲板に上る。確かに日本だ、緑の木が見える。「ナホトカ」の木は葉がなかったが確かに日本、間違いなした。船はだんだんと日本列島に近づいて行く。午後六時頃、舞鶴港に着く。しばらくすると小船が近づ

いて来る。

アメリカ人のMPが小船から信濃丸に乗船する。英語で解らぬ言葉でペラペラと話す。間もなく小船で上陸をする。私らは九日の夜は港湾で宿泊す。翌五月十日午前九時頃、舞鶴港平栈橋に上陸をす。一番に目に付いたのが「大日本国防婦人会」の襷たすきを掛けた婦人会で、日の丸の旗を手にして「御苦労様でした」と迎えてくれたときの気持ちは忘れることができません。いまだに脳裏に残っております。その時、日本の女性は小さいと思いましたが、ロシア人は大きいから、小さく思いました。なお、その時「誰か故郷を思わざる」のレコードが拡声器で流れた時、涙がこぼれました。戦争で負けて三年間抑留生活をした者に対し、婦人会をはじめ各団体、機関の方々が出迎えに来てくれ感無量でした。舞鶴に上陸す。一番に風呂で、入浴と検疫を受け、新しい衣服に着替え、昼御飯に米の御飯を頂いた時、感謝の涙が出ました。

その後三日、MP機関が調書を取り、引揚援護

局の手続きも終わりトラックで東舞鶴駅へ出る。特別専用列車で京都へ出る。京都駅で京都の叔父二人、叔母が駅のホームで「貞次、よく帰ったな」と呼んで下さった時、驚きました。「連絡なしによく知ったな」と言うと、新聞やラジオで聞いたと答えてくれました。京都駅より野洲まで指定席がありました。第三郎が京都駅まで迎えに来てくれた。指定席を弟が案内する。弟と二人で京都駅より野洲駅まで帰る。汽車は満員でしたが、指定席まで設けて頂き恐縮しました。野洲駅を降りると親戚の人、隣組の方々が野洲駅まで出迎えに来てくれました感謝しました。皆さんに迎えられ我が家へ歩いて帰りましたが、道路が狭く思いました。ロシアの広い国から日本へ帰ると、至る所が狭い感じでした。

昭和十九年二月九日、我が家を出発してから四年三カ月、実に変わった感じでした。留守中、家族は健在でした。何よりの幸せでした。夕食は親戚の皆さんと歓迎の祝宴でした。四年三カ月ぶり

で我が家の布団で寝るのも夢のようでした。ロシアより帰国してから満五十六年過ぎました。

舞鶴の援護局で金四百円頂いた時びっくりしましたが、物価も高いのでびっくりしました。

長々と六十年余りの思い出を書きましたが、まとまりのないことをお詫び申します。

### 【執筆者の紹介】

大正十二年八月二十七日 滋賀県野洲郡野洲町市

三宅に出生

昭和十三年三月二十五日 野洲町立野洲高等小学

校卒業

昭和十三年四月一日 野洲町立青年学校に入学

昭和十六年九月十日 呉海軍工廠に徴用と同時に、

同廠青年学校に転校

昭和十九年一月三十一日 呉海軍工廠青年学校卒業

業

昭和十九年二月十日 呉海軍工廠退職

昭和十九年二月十日 広島にて現役入営

満州国黒河省瓊瑋朝水満州  
第六一二部隊野砲第四中隊  
現地入隊

昭和二十年八月十日 兵長に任命

昭和二十年八月二十一日 満州国朝水陣地にて抑留

昭和二十年九月二十日 ブラゴエシチェンスク収

容所に入所、同国営農場  
を経て、アレクサンドル  
フカ収容所に移動

昭和二十二年十月 ナホトカ収容所に移動

昭和二十三年五月七日 ナホトカを経て舞鶴に復員

員

昭和三十二年四月一日 野洲町市三宅区協議員任

命、同五十二年二月二十

一日に至る

昭和五十二年四月一日 市三宅農業組合長に任命、

同五十六年三月三十一日

に至る

昭和五十六年四月一日 市三宅区長代理を任命、

同区長を経て平成十三年

三月三十一日に至る

昭和六十二年四月一日 野洲町同和対策推進協議

会委員に任命、現在に至

る

平成元年四月一日 北野学区会長に任命、同十年

三月三十一日に至る

平成二年四月一日 野洲町区長会長に任命、同三

年三月三十一日に至る

平成三年四月一日 野洲川土地改良区右岸下流調

整委員長に任命、同十四年三

月三十一日に至る

#### 推薦の言葉

氏は抑留中、生死の境をさまよう労苦を体験されながらも、苦難を乗り越えて復員される。復員後は専ら地元区長として永年にわたる献身的な努

力を重ねられ、ことに土地改良区事業に格別の功績を残され区民の尊敬の的となる。これも、ひとえに抑留生活の苦難から生じた滅私的な努力からもたらされたものと認められ、その体験を寄稿されるにふさわしいと思えますので、ここに推薦いたします。

(滋賀県 荒川 正次)